（第３号様式）(Form No. 3)

学 位 論 文 要 旨
Dissertation Abstract

氏名：　赤松芳郎
Name

学位論文題目：
Title of Dissertation

Study on Change of Agricultural Livelihood and Its Contemporary Problems in Eastern Bhutan
(東ブータンの農業を中心とした生業変化と農村問題に関する研究)

学位論文要旨：
Dissertation Abstract

ヒマラヤ山脈には多様な自然環境・民族・経済状況が存在し、これらはヒマラヤに存在する多様で固有の生業・生活の展開に寄与してきたと言われている。これらのヒマラヤ研究の殆どはネパールを中心とした西ヒマラヤ地域を中心におこなわれており、ブータンを含む東ヒマラヤ地域では研究はおこなわれてこなかった。ネパールからおよそ西に70km離れたブータンはネパールなどとは民族・歴史・社会・経済状況において大きく異なるが、国外研究者に対する厳しい調査規制と実証的研究の不足により未だ知られた国家ではない。特に東ブータンはこれまでブータン研究の中心地となってきた西ブータンとは明確に異なる民族が占有的に居住しており、その生活・生業活動も東西での差異が予想される。さらに東ブータンの農山村にておこなった予備調査により、生業活動の大きな変化と、深刻な農村部から都市部への移住問題が明らかとなった。
ブータン内の社会・経済の大きな変化はこれまで多くの研究者が度々指摘してきたことである。しかし、農山村、もしくは農山村レベルにおいて人々の生活・生業がどのように変化し、近代化が急進する現在、どのような問題が生じているかということに関しては殆ど注意が払われてこなかった。特に東ブータンはこれまでの生業に関する記録も殆ど残っておらず、伝統的な生業は人々の記憶から消えつつある。また現在進行する人口流出は農山村で将来様々な深刻な農村問題を引き起こすことが予期される。本研究の目的は東ブータンでのフィールドワークをもとに、過去の農業活動を中心とした生業から現在までの変化を記載し、現在の農山村が抱える問題を明らかにすることにある。

1) 近代化開発以前の生業活動(シュマル村落での事例)
対象村落は比高1500mを超す山地斜面中腹に位置する。調査から、異なる農耕技術や多様な生業活動に複合的に従事することにより、村落周囲の多様な自然環境を広く利用していたことが明らかとなった。森林は焼畑によって主たる食料生産の場となり、斜面上部と下部では異なる栽培作物・輪作体系が適用されていた。これらは、標高による自然環境の差異を合理的に利用したものであった。さらに、これまでブータンでは報告されてこなかった焼畑地所有・選択体系も明らかとなった。また、焼畑に適さないマツ林などはウシの林間放牧地として利用され、村民の近隣から広域に渡る活発な交易活動も明らかとなった。交易では村落間の自然環境の差異を反映した取引がなされるが、インドとの越境交易においては食料獲得の他に、近代化以前の政府による納税(物納義務)も交易活動の一側面を担っていたことが明らかとなった。交易を通して村落には常畑耕起用の犁ウシを生産する特殊な種ウシや蚕卵などがもたらされており、交易活動を通して物資・技術などが他地域から移入され、村落内生業に取り込むことによって生産性を最大化さ

せる努力がなされていたことが示唆された。

2) 生業変化(焼畑の終焉)と村落生活の変化(ジリ村落での事例)
対象村落は舗装車道から徒歩約2時間の河川沿いに位置する。東ブータン(特にツァンラ族)で主たる食料生産技術であった焼畑の多くは1970～80年代にかけて終焉を迎えた。その原因としては主に次の３点が明らかとなった。(i) 技術革新・集約的労働力投下による常畑生産量の増加、(ii) 仏教教義の浸透、(iii)政府による土地所有制度の変化と火入れ規制。東ブータンでの焼畑終焉に関して特記すべきは(ii)であろう。開発による交通網向上と仏僧の説法による教義の浸透により不殺生戒が村民レベルへと浸透し、焼畑における火入れは生き物を殺生するという観点から宗教・社会的なスティグマが形成された。以上、技術・政策・宗教の変化の中でブータンにおいて焼畑が完全禁止される1995年以前に東ブータンで多くの焼畑が終焉へと向かったことが明らかとなった。
焼畑の終焉と同じくして向上した交通網などを通して村落には貨幣経済が浸透した。焼畑で耕作されていた穀類は多用途をもつトウモロコシを除いて消滅もしくは減少傾向にあり、代わって商品作物が存在感を増し始めている。特に雑穀食から輸入米への主食物変化は限られた稲作適地しかもたない村落、ひいては東ブータンのこれまでの農業に大きな影響を及ぼしていた。食料生産を目的とした農村生活は食料消費の生活へと現在大きく変化しつつあることが明らかとなった。

3) 開発が進む現代の農村における諸問題 [ダウゾル村落を中心とした事例]
対象村落はインドへと通じる国道沿いに位置し、早くから近代化の影響を受けてきた村である。対象集落での焼畑は1960年代には急速に下火となり、代わって常畑での輸出用ジャガイモ栽培が主農業となった。常畑での栽培作物は夏季のジャガイモとトウモロコシであり、農耕暦は単純化し、冬季の休耕率は90%を超す。村での主食はジャガイモを販売して得るインドからの輸入米である。
現在、村内には多くの空き家(離村世帯)がみられ、村落外縁には35%を超す放棄地が出現している(離村世帯の農地除く)。村民達は農業に対する労働力不足を認識する一方で、教育を受けた子供たちには村外でホワイトカラー職につき、都市部で近代的で快適な生活を傍受することを期待している。年老いた親たちは村外で暮らす子供に引き取られ、離村世帯が増加するという過疎化スパイラルに陥っている。村に残る高齢者たちは将来の農地を含む財産管理と生活のことを杞憂しており、離村を望まず子供に帰郷を促している高齢者もいる。しかし、貨幣経済が浸透したブータン社会のなかで安定した現金収入機会の乏しい村に帰郷するかは不透明である。低人口密度とともに国内市場規模が小さく、さらに地理的な交通不便性を抱える東ブータンにおいて現在農業以外の産業育成は困難であるが、農山村では人口流出・放棄地の拡大が生じており、農業、さらには農山村の存在意義が問われる局面にさしかかっていることが明らかとなった。